

【論文】

誤解や外的要因に基づく言われのない非難に対する 言語行動

—日本人社会人・日本人学生・留学生の比較から—

末 田 美香子

Speech Acts Regarding Unfounded Criticisms Based on Misunderstandings
and External Factors:
Comparing Working Japanese Adults, Japanese Students
and Foreign Students in Japan

SUETA, Mikako

要旨：本研究では、田中・スペンサー＝オーティン・クレイ (2004)、大浜 (2011) により、従来の先行研究の指摘による「日本人は謝罪が多い」という特徴が見られなかった相手の誤解や外的要因に基づく「言われのない非難」場面を取り上げ、日本人社会人、日本人学生、及び留学生の言語行動の特徴とその背景にある意識について「フェイス(face)」(Brown & Levinson1987)、及び「フェイスワーク(facework)」(Ting-Toomey1994)の観点から分析、考察した。調査は、相手誤解場面、外的要因場面について、対友人・先生を設定し、談話完成テスト、及び「責任の所在」「謝罪の必要性」についての評価尺度によって行われた。その結果、謝罪表現は、日本人全体として少ないとは言えず、従来の先行研究の指摘が当てはまった。場面別では、相手誤解場面において3者の値に一定の傾向が見出された。日本人社会人は、相手誤解場面の友人に対して「謝罪の必要性」が低いと考え、相手の「ポジティブフェイス(positive face)」を脅かす言語行動をとるのに対し、日本人学生は同場面の先生に対して同様の傾向があり、友人に対しては互いのポジティブフェイスを脅かすのを避ける傾向があった。これらをフェイスワーク

の観点から考察すると、1) 日本人社会人は友人に対して先生ほど「相互扶助的なフェイス保持」(熊谷2013)を期待していない、2) 日本人学生は、先生に対しては立場上それが期待できず、友人に対しては互いにこのやりとりを避けようとしているのではないかと考えられる。一方、留学生は、全体的に日本人よりも「責任や謝罪の必要性がある」「母国よりも日本における方が謝罪の必要性がある」と考える傾向があり、「日本人は謝罪が多い」というステレオタイプが意識されていることが窺えた。相手誤解場面の言語行動は、先生に対しては相手のポジティブフェイスに訴えかける傾向があり、友人に対しては自分のポジティブフェイスを保つ言語行動が少ない傾向があった。

キーワード：相手誤解場面、外的要因場面、謝罪、フェイス、フェイスワーク

1. はじめに

円滑な人間関係を構築し、維持するために、人は様々な働きかけや配慮を行っている。Brown & Levinson (1987) では、相手に認められたいという「ポジティブ・フェイス (positive face)」と、自分の領域を侵されたくないという「ネガティブ・フェイス (negative face)」という2つの「フェイス (face)」の概念が挙げられ、対人行動において互いのフェイスを保ち、配慮する「ポライトネス (politeness)」理論が提唱されている。

日本人の言語行動については、様々な言語による対照研究がなされており、その特徴として、謝罪や配慮が多く、婉曲な言い方が好まれるという傾向が指摘され(池田1993, 水谷1979, 李2004等)、ポライトネスについては、遠慮やわきまえ、敬語の使用等、相手の領域を尊重し、距離をおくネガティブ・フェイスを保つ傾向が強いとされている(滝浦2008)。

しかし、このような特徴はどのような場面でも当てはまるのだろうか。田中・スペンサー＝オーティー・クレイ (2004) では、相手の誤解や電車の遅延等の外的要因に基づく言われのない非難を受ける場面を取り上げ、「日本人は謝罪が多い」という傾向が当てはまるか、調査されている。調査対象は、日本人大学生、及び英語を母語とするイギリス・カナダ人大学生であり、談話完成テストによる記述が行われた。結果は、日本人が謝る頻度

はそれ程高くなく、特に不満を言う人に非がある場合はかなり低いものであるとされている。また、大浜（2011）でも、日本人学生を対象に調査され、相手の誤解に基づく言われのない非難に対しては一般にあまり謝罪が行われれないという結果が出されている。

これらの先行研究では、これまでの日本人の典型的な言語行動とされた特徴とは異なる結果である点が非常に興味深く、一方的に自分に非があるとは考えにくい場面では、謝罪や配慮といった言語行動はあまり行われないのだろうかという疑問が生じる。

しかしながら、田中他（2004）、大浜（2011）では日本人の調査対象として、学生のみを調査しており、田中他（2004）でも指摘されているように、大学生はステレオタイプを生み出すような一般の日本人を代表するものではなく、社会人とは異なる特徴を持つのではないかという疑問が残る。また、彼らがそれぞれどのような意識を持ち、言語行動の選択を行うのかという点も興味深い。

一方、筆者の携わる日本語教育の観点からは、日本人学生が表現をソフトにし、依頼や断りの摩擦をうまく緩和しているのに対し、留学生は断られた後も行為要求を繰り返す等、相手の事情に対する配慮が欠けている（熊井1992）等の指摘がなされているが、同様に、この特徴はどのような場面でも当てはまるのだろうか。相手の誤解や外的要因に基づく言われのない非難に対して、留学生はどのような意識を持ち対処するのかという疑問が生じた。

そこで本研究では、相手の誤解や外的要因に基づく「言われのない非難」場面を取り上げ、日本人社会人（以下、社会人）、日本人学生、留学生を対象とした言語行動の特徴を明らかにし、その背景にどのような意識があるのかについて考察する。

2. 調査の概要

調査は、言われのない非難に対する言語行動と、その際の対象者自身の

「責任の所在」「謝罪の必要性」についての意識を知るため、談話完成テスト、及び評価尺度アンケートの2種類を設定し、同一紙面に記載した。実施は、紙媒体にて回答を依頼し、筆者が回収した¹。

談話完成テストの結果はBeebe, Takahashi & Uliss-Weltz (1990)、池田(1993)等を参考に作成した意味公式に分類した。

2.1 談話完成テスト

言われのない非難の状況設定は田中他(2004)を参考に、ほぼ同様の以下の2場面を設定し、それぞれ対友人・先生について調査した。

①約束の時間・場所が違うと相手が誤解して怒る相手誤解場面

②電車事故による約束時間の遅れに相手が怒る外的要因場面

対先生の設定は、日本人学生・留学生は大学の講師とし、社会人は現実性を考慮し、習い事の講師とした。以下に各々の設定を示す。

①相手誤解場面

1) 対友人:日本人学生・留学生・社会人対象

あなたは友達と映画を見に行くことになりました。きちんと約束した通り、渋谷駅で友達を待っていましたが、約束の時間になっても友達は来ません。そこで友達の携帯に連絡してみると、友達は新宿駅で待っているということでした。もうすぐ映画が始まってしまいます。友達は怒ったような感じで言います。

友 達：新宿って言ったよね！なんで今ごろ渋谷にいるの？

あなた： _____

2) 対先生:日本人学生・留学生対象

あなたは先生と2時半に研究室でレポートについて相談する約束をしています(確かに2時半に約束しました)。2時半ちょうどに研究室に着きましたが、先生はあなたが遅刻したと言うのです。先生は怒ったような感じで言います。

先 生：なんでこんな時間に来たの？約束の時間に30分も遅れて！

あなた： _____

3) 対先生:社会人対象

あなたは習い事の先生と2時半にある場所で相談をする約束をしています（確かに2時半に約束しました）。2時半ちょうどにその場所に着きましたが、先生はあなたが遅刻したと言うのです。先生は怒ったような感じで言います。

先生：なんでこんな時間に来たの？約束の時間に30分も遅れて！

あなた：_____

②外的要因場面

1) 対友人:日本人学生・留学生・社会人対象

あなたは友達と映画を見に行くことになりました。約束した通り、新宿駅へ向かっている途中で電車が事故にあい、渋谷駅から動くことができません。もうすぐ映画が始まってしまいます。そこで友達の携帯に連絡してみると、友達は新宿駅で待っていて、怒ったような感じで言います。

友達：新宿って言ったよね！なんで今ごろ渋谷にいるの！

あなた：_____

2) 対先生:日本人学生・留学生対象

あなたは先生と研究室で2時半にレポートについて相談をする約束をしています（確かに2時半に約束しました）。研究室に行く途中で、電車が事故にあい、しばらく動かなかったため、約束の時間に30分遅れてしまいました。先生は怒ったような感じで言います。

先生：なんでこんな時間に来たの？約束の時間から30分も過ぎてるよ！

あなた：_____

3) 対先生:社会人対象

あなたは習い事の先生とある場所で2時半に相談をする約束をしています（確かに2時半に約束しました）。そこに行く途中で、電車が事故ににあい、しばらく動かなかったため、約束の時間に30分遅れてしまいました。先生は怒ったような感じで言います。

先生：なんでこんな時間に来たの？約束の時間から30分も過ぎてるよ！

あなた：_____

2.2 評価尺度アンケート

評価尺度アンケートは、「責任の所在」「謝罪の必要性」についての意識を知るために行った。各場面で、3段階（「責任の所在」「謝罪の必要性」がある=3、「どちらともいえない」=2、「責任の所在」「謝罪の必要性」がない=1）に丸印をつけてもらった。留学生については、日本と母国との差異を知るため、「あなたの国ではどうですか」という設問も設け、母国の場合を想定して記入してもらった。

2.3 調査対象者

調査は2013年1月～2月にかけて、社会人、日本人学生、留学生を対象として行った。留学生については、このような待遇に関わる調査の実施に当たり、日本における日本人とのコミュニケーションの経験があり、初級レベルの語彙、文法項目を一通り学習している必要があると考えた。そのため、筆者が授業内、及び実際のコミュニケーションにおいて、中級レベル以上と判断し、在日期間が半年以上の学習者を対象とした²。有効回答数は社会人55、日本人学生68、留学生96であった。調査対象者の内訳は表1に示す。

表1 調査対象者の内訳

対象者 (合計数)	社会人 (55)		日本人学生 (68)		留学生 (96)			
属性								
年齢	20-60代		10-20代		10-20代			
男/女	11/44		13/55		38/58			
職業・身分	教師	20	大学生	67	大学生	72		
	大学職員	15	大学院生	1	大学院生	9		
	会社員	5			別科生	11		
	主婦	4			研究生	4		
	その他	11						
国籍	日本				中国	63	韓国	11
					タイ	9	その他	13 ³

3. 調査結果の分析

3.1 「責任の所在」と「謝罪の必要性」の意識

評価尺度アンケートによって得られた各場面の「責任の所在」及び「謝罪の必要性」の平均値、及び標準偏差を表2に示す。社会人と日本人学生、及び留学生の日本と母国の間での統計的な有意差を確認するためにt検定($p < 0.05$)を行い、2つの値の間に有意差が認められた部分には表中に不等号を記した。

全体としては「責任の所在」「謝罪の必要性」ともに相手誤解場面より外的要因場面の値が高く、対友人よりも対先生で高い傾向が見られた。

社会人、日本人学生、留学生の傾向を見ると、社会人は、両場面において対友人・先生ともに「責任の所在」が3者間で最も低く、全体として責任は低いと考える傾向がある。また、相手誤解場面の対友人では「謝罪の必要性」が3者間で最も低い。

日本人学生は、相手誤解場面の対先生で「謝罪の必要性」が3者間で最も低く、両場面の対友人において「謝罪の必要性」が社会人と比べて高い。

社会人と日本人学生の傾向を見ると、特に「謝罪の必要性」において対照的であることがわかる(表2の□部分参照)。つまり、社会人は両場面において、友人に対して「謝罪の必要性」が低いと考え、日本人学生は相手誤解場面の先生に対して「謝罪の必要性」が低いと考える傾向がある。

留学生は、全体として、3者の中で最も高い値を示す傾向があり、日本人より「責任の所在」「謝罪の必要性」があると考える傾向にあることがわかる。母国との差を見ると「謝罪の必要性」では、日本の方が高い傾向にあり、日本における方が「謝罪の必要性」があると考えていることがわかる。

表2 評価尺度の平均値(標準偏差)

場面	対象 評価項目	社会人	日本人 学生	留学生	
				日本	母国
相手 誤 解	対友人「責任の所在」	1.51	< 1.79	2.25	2.23
		(0.65)	(0.79)	(0.88)	(0.85)
	「謝罪の必要性」	1.95	< 2.32	2.47	> 2.27
		(0.84)	(0.77)	(0.70)	(0.75)
	対先生「責任の所在」	1.87	2.00	2.19	2.09
		(0.60)	(0.51)	(0.65)	(0.61)
「謝罪の必要性」	2.65	> 2.37	2.67	> 2.47	
	(0.69)	(0.72)	(0.60)	(0.66)	
外 的 要 因	対友人「責任の所在」	1.89	1.99	2.15	2.08
		(0.49)	(0.67)	(0.64)	(0.57)
	「謝罪の必要性」	2.67	< 2.94	2.62	> 2.44
		(0.66)	(0.23)	(0.68)	(0.74)
	対先生「責任の所在」	2.20	2.29	2.56	2.46
		(0.83)	(0.82)	(0.67)	(0.69)
「謝罪の必要性」	2.95	3.00	2.92	2.92	
	(0.29)	(0.00)	(0.31)	(0.31)	

< > : 「社会人と日本人学生」及び「留学生の日本と母国」の間で t 検定 ($p < 0.05$) により有意差が認められた大小を示す。

□ : 社会人と日本人学生の値の比較において、特徴的な部分を示す(本文中3.1を参照)。

3.2 意味公式の出現割合からみた言語行動の特徴

3.2.1 分類に用いた意味公式

談話完成テストから得られた記述は、Beebe *et al.* (1990)、池田 (1993) 等を参考に以下の23の意味公式に分類した。なお、「」内は本研究の調査において見られた記述例である。

- 1) 謝罪：「すみません」「申し訳ありません」等の明確な謝罪表現。
- 2) 謝罪内容：「遅れてすみません」「遅刻しました」等の謝罪内容の具体的な叙述。
- 3) 説明：「今電車の事故でまだ渋谷なんだ」「電車が動かないの」等の事情の説明。
- 4) 弁明：「間に合うように家を出たのですが」「2時半の約束だと思っていたので」等、自分の責任を逃れる弁明。
- 5) 知識・技能の欠如：「日本語が下手なので」「日本語がわからなくて」等。
- 6) 責任承認：「わたしが時間を間違えていました」「間違えて渋谷駅だと思い込んで」等、自分の責任を認めるもの。
- 7) 自分の行動に関するマイナス評価：「もっと早く連絡すべきでした」「余裕をもって出るべきでした」等。
- 8) 自製の約束：「これから気を付けます」「これからは遅れないようにします」等。
- 9) 配慮：「せっかくお時間をとっていただいたのに」「お待たせしてしまいました」「寒かったですよ」等。
- 10) 評価を尋ねる：「わたしが悪かったですか」「2時に着いたほうがよかったですか」等、自分の行動に対する相手の評価を尋ねるもの。
- 11) だめめる：「まあ、まあ、そんなに怒らないでよ」「怒らないでー」等。

- 12) 許しを請う：「許してよ」等。
- 13) 確認：「渋谷じゃなかった?」「確認してもらえますか?」等、約束の確認や相手の確認行動を促すもの。
- 14) 正当性の主張：「約束の時間は確かに2時半です」「約束は2時半ですから、わたしは遅刻ではない」等。
- 15) 責任追及・否定：「たぶん先生が間違えていると思います」「渋谷駅って確かにあなたが言ったわよ」等、相手の責任追及や否定を行うもの。
- 16) 状況判断・評価：「映画の時間に間に合いそうにないけど」「もう映画見るには遅いから」等、話し手の状況判断や評価に関する叙述。
- 17) 働きかけ：「映画見る日変えない?」「これからどうする?」等、相手に対して提案、相談等の働きかけをするもの。
- 18) 今後の行動：「今からすぐ新宿へ行くから」「急いで向かうよ」等、話し手の今後の行動に関する叙述。
- 19) 呼びかけ：「先生」「おまえさあ」等。
- 20) 感情表出：「えー」「あー」等。
- 21) 了承：「わかりました」等。
- 22) 注意喚起：「ほら、見て」等。
- 23) 笑い：「笑い」という記載があるもの。

3.2.2 相手誤解場面・外的要因場面における意味公式の出現割合

表3は、場面別、対人別に見た各意味公式の使用合計数に占める割合を示したものである。

外的要因場面では、全体として「1）謝罪」「3）説明」が30~40%程度で主たるものであり、社会人、日本人学生、留学生の3者の違いはそれほど見られなかった。これは3.1で述べた「責任の所在」「謝罪の必要性」の値が全体的に高いこととも一致し、外的要因場面では3者ともに相手の許

しや理解を得ようと考える傾向にあることがわかる。

一方、相手誤解場面の意味公式は、「1）謝罪」「4）弁明」「6）責任承認」「13）確認」「14）正当性の主張」「15）責任追及・否定」「17）働きかけ」「18）今後の行動」「20）感情表出」と多様であり、3者の値に一定の傾向が見られた。以下、3.2.4において、それぞれの言語行動の特徴を分析する。

表3 意味公式の出現割合 (%)

場面設定・対象 意味公式	相手認識場面				外的要因場面						
	社会人	対友人 日本人学生	留学生	対先生 日本人学生	社会人	対友人 日本人学生	留学生	対先生 日本人学生			
1) 謝罪	8.02	12.88	15.59	29.10	27.04	30.18	29.00	34.00	40.60	45.70	48.80
2) 謝罪内容	0.53	0	0.34	8.86	1.89	3.60	3.50	1.40	0.38	9.70	4.17
3) 説明	0.53	1.29	1.69	0	0	0	28.90	30.70	32.70	32.73	35.42
4) 弁明	8.02	6.01	2.03	11.40	8.18	8.10	2.89	3.26	1.14	9.70	4.30
5) 知識・技能の欠如	0	0	0.68	0	0	0	0	0	0	0	0
6) 責任承認	8.02	3.86	8.47	5.70	5.66	3.15	0	0	0	0	0.42
7) 自分の行動に関する マイナス評価	0	0	0	3.16	0	0.45	0.58	0.93	0	4.85	1.61
8) 自製の約束	0	0	0	1.27	1.26	1.35	0	0	0	0.61	1.61
9) 配慮	0	0	0	3.80	1.26	0.45	0	0.77	0	0	0.54
10) 評価を尋ねる	0	0	0	1.27	0	0	0	0	0	0	0
11) だめ	0	0	0.34	0	0	0	0	0.47	0.38	0.61	0
12) 許しを請う	0	0	0	0	0	0	0	0.47	0.38	0	0
13) 確認	20.86	22.31	12.54	9.49	11.32	9.46	0	0	0.38	0.61	0.54
14) 正当性の主張	7.49	7.30	9.49	12.66	23.90	22.07	0	0	0	0	0
15) 責任追及・否定	9.63	3.00	9.83	0.63	6.29	1.35	0	0	0	0	0
16) 状況判断・評価	4.28	4.72	4.75	0	0	0	9.83	8.84	9.89	0	0.42
17) 働きかけ	11.20	17.20	14.20	1.27	0	0.45	19.70	14.90	19.40	0.61	0.54
18) 今後の行動	7.49	9.87	10.17	0	0	0.45	4.62	3.26	3.80	0	0.54
19) 呼びかけ	0	0	0	1.27	4.40	9.46	0	0	0	0	5.42
20) 感情表出	13.90	11.16	8.47	10.13	7.55	9.01	1.16	0	0	0	0
21) 了承	0	0	1.40	0	0	0	0	0	0	0	0
22) 注意喚起	0	0	0	0	1.26	0	0	0	0	0	0
23) 笑い	0	0	0	0	0	0.45	0	0	0	0	0

□ : 社会人、日本人学生、留学生の比較において、特徴的な値を示す(本文中3.2.4を参照)。

3.2.3 「謝罪」の出現割合

意味公式「1）謝罪」の出現割合を見ると、全体では外的要因場面に多く、対先生で使用が多い。各場面の「1）謝罪」の割合を他の意味公式と比較すると、上位に位置しており、使用が少ないとは言えない（表3参照）。

一方、田中他（2004）、大浜（2011）では、回答者数に占める謝罪表現使用の割合から、謝罪が少ないと述べられている。この観点からの値を表4に示す。

この観点から比較すると、外的要因場面では、田中他（2004）：64.01%に対して、本研究では日本人学生：対友人88.1%、対先生97.0%であり、社会人：対友人87.0%、対先生96.4%である。

相手誤解場面では田中他（2004）：21.88%、大浜（2011）：対友人34.6%、対先生21.3%に対して本研究では日本人学生：対友人41.2%、対先生57.4%、社会人：対友人27.3%、対先生65.4%である。

相手誤解場面の社会人の対友人を除き、それぞれが大幅に上回る値となり、この観点からも本研究では日本人全体として謝罪表現使用が少ないとは言えない。

表4 回答者数に占める謝罪表現使用の割合（%）

場面設定 研究事例	外的要因場面		相手誤解場面	
	対友人	対先生	対友人	対先生
田中他（2004）	64.01		21.88	
大浜（2011）	—	—	34.6	21.3
本研究				
日本人学生	88.1	97.0	41.2	57.4
社会人	87.0	96.4	27.3	65.4
留学生	79.8	94.7	43.8	60.9

3.2.4 社会人、日本人学生、留学生の言語行動の特徴

以下では、社会人、日本人学生、留学生の意味公式の使用に一定の傾向が見られた相手誤解場面を中心に、Brown & Levinson (1987) によるフェイスの観点から、それぞれの特徴を分析する(表3の□部分参照)。

相手誤解場面の意味公式の出現割合を見ると、社会人は、対先生で「2」謝罪内容(8.86%)「7」自分の行動に関するマイナス評価(3.16%)が3者間で最も多く、「14」正当性の主張(12.66%)「15」責任追及・否定(0.63%)が最も少ない。このことから、社会人は先生に対しては自分のポジティブフェイスを脅かす言語行動が多く、相手のポジティブフェイスを脅かす言語行動は少ないことがわかる。

一方、対友人では、社会人は日本人学生と比較して「15」責任追及・否定(9.63%)が多く、相手のポジティブフェイスを脅かす言語行動が多い。また、「1」謝罪(8.02%)は少ない傾向にある。

それに対して日本人学生は、対先生で「15」責任追及・否定(6.29%)が3者間で最も多く、「14」正当性の主張(23.90%)も社会人と比較して多い。しかし、「2」謝罪内容(1.89%)「7」自分の行動に関するマイナス評価(0%)は社会人と比較して少ない。このことから、日本人学生は先生に対しては相手のポジティブフェイスを脅かしたり、自分のポジティブフェイスを保つ言語行動が多く、自分のポジティブフェイスを脅かす言語行動は少ないことがわかる。

一方、対友人では、日本人学生は「15」責任追及・否定(3.00%)「6」責任承認(3.86%)が3者間で最も少なく、友人に対しては互いのポジティブフェイスを脅かすことを避ける傾向にあることがわかる。

留学生は、対先生で両場面において「19」呼びかけ(相手誤解場面9.46%、外的要因場面5.42%)が3者間で最も多く、相手誤解場面においては「15」責任追及・否定(1.35%)が日本人学生と比較して少ない。このことから、留学生は先生に対しては相手のポジティブフェイスに訴えかけることが多いことがわかる。

一方、対友人では「4）弁明」（2.03%）「13）確認」（12.54%）が3者間で最も少なく、「1）謝罪」（15.59%）「6）責任承認」（8.47%）が多い傾向にある。このことから、留学生は友人に対しては自分のポジティブフェイスを保つ言語行動が少なく、自分のポジティブフェイスを脅かす言語行動を多くとる傾向にあることがわかる。

4. まとめと考察：フェイスワークの観点から

本研究の主な結果を以下にまとめ、考察する。謝罪表現使用については社会人、日本人学生ともに全体として少ないとは言えず、「責任の所在」「謝罪の必要性」の意識は対先生で高い傾向が見られ、本研究では言われのない非難に対しても、日本人は目上に対してより謝罪を多く行うという従来の先行研究の指摘が当てはまり、田中他（2004）大浜（2011）とは異なる結果が得られた。

言われのない非難の状況設定は田中他（2004）とほぼ同様に行ったが、日本人学生の謝罪表現使用の割合が異なる結果となったのは、調査対象者の違いによるものなのかは不明である。しかし、一方的に自分に非があるとは考えにくい言われのない非難を受けた場合に、日本人の謝罪は少ないとは一概に言えないことが明らかにされた。今後は、対照研究も含め、より様々な場面における研究が必要とされる。

社会人、日本人学生、留学生の意識と言語行動については、それぞれ異なる特徴が見出された。以下、3者の値に一定の傾向が見出された相手誤解場面を中心とした特徴についてまとめ、考察を行う。

社会人と日本人学生の意識の比較では、「謝罪の必要性」において対先生・対友人で対照的な傾向が見られた。社会人は、友人に対して「謝罪の必要性」が低いと考え、相手のポジティブフェイスを脅かす行動をとる傾向があるのに対し、日本人学生は先生に対して同様の傾向が見られた。

言語行動の比較では、社会人は、全体的に「責任の所在」の意識が低いにもかかわらず、先生に対して自分のポジティブフェイスを脅かす言語行

動が多く、相手のポジティブフェイスを脅かす言語行動は少ない傾向にある。それとは対照的に、日本人学生は、先生に対して相手のポジティブフェイスを脅かし、自分のポジティブフェイスを保つ言語行動をとる傾向にある。一方、友人に対しては、社会人は、相手のポジティブフェイスを脅かす言語行動をとり、謝罪も少ない傾向にあるが、日本人学生は、互いのポジティブフェイスを脅かす言語行動を避ける傾向がある。

このようなフェイスに関わる言語行動を説明する観点として「フェイスワーク (facework)」という概念がある (Ting-Toomey1994)。これはポライトネスの上位概念に位置するものであり、聞き手のフェイスを保護・促進するというポライトネスに加え、話し手が自身のフェイスを守ったり、聞き手のフェイスを攻撃したりすることも含めたすべての営みをカバーする概念である。

熊谷 (2013) では、この観点から日本語話者には「相互扶助的なフェイス保持パターン」が共有されると述べられている。これは参加者同士が互いに自分でなく、相手のフェイスをもっぱら手当するものであり、単に相手のフェイスを保護・促進するのではなく「自分のフェイスを自分で守ったり促進したりするのは適切ではない」という制約も含意していることが重要な特徴であるとされている。

本研究における社会人と日本人学生の特徴は、上記観点から次のように説明することができるのではないか。相手誤解場面においては、社会人は全体的に「責任の所在」の意識が低いにもかかわらず、先生に対しては謝罪内容を明確に述べ、自分の行動をマイナス評価し、自分のポジティブフェイスを脅かす言語行動をとっている。それは、互いに社会人であり、目上である先生に対しては自分のポジティブフェイスを脅かす言語行動をとることによって、相手から保護される言語行動を期待できると考えているからではないだろうか。しかし、友人に対しては、謝罪は少ない傾向にあり、相互扶助的なフェイス保持を先生ほどは期待していないことが窺える。

それに対して日本人学生は、先生に対し、相手誤解場面においては、そ

の立場の違いから相手による自分のポジティブフェイスの保護を期待できないため、自らの立場を正当化し、自分のポジティブフェイスを保護しようとするのではないか。一方、友人に対して互いのポジティブフェイスを脅かす言語行動を避けるのは、相互扶助的なフェイス保持の実現を避け、この局面を面倒なく無難に乗り切りたいという意識の表れではないだろうか。両者が対先生・友人で対照的であることが興味深い。

留学生は、社会人、日本人学生より「責任や謝罪の必要性がある」「母国よりも日本における方が謝罪の必要性がある」と考える傾向があり、「日本人は謝罪が多い」という言語行動のステレオタイプが意識されていることが窺える。相手誤解場面の言語行動は、先生に対しては相手のポジティブフェイスに訴えかけることが多い。一方、友人に対しては、自分のポジティブフェイスを保つ言語行動が少なく、謝罪や責任承認を行う等、自分のポジティブフェイスを脅かす言語行動を多くとる傾向が見られた。これには、今回の調査対象者がアジア圏の学生が多かったことも影響している可能性があるが、留学生が実際の日本人よりも、より日本人的なステレオタイプに沿った意識と言語行動を持っていることが注目される。フェイスワークの観点から考えると、日本語母語話者である日本人による自分のフェイスの保護を期待した上での言語行動である可能性もある。

しかしながら、今回の調査は意識調査であることから、このような言語行動を互いがどのように受け止め、どのような効果が得られたのかという観点からの分析は行うことができなかった。今後は、実際の発話資料を基に、上記観点も踏まえた研究が課題とされる。

〈注〉

- 1 回収は、その場で、あるいは後日、筆者が直接行った。また、留学生の紙面には漢字にルビをふり、難解と思われる表現には翻訳を記した。
- 2 実際の調査対象者の在日期間は半年～4年であった。
- 3 台湾・香港・モンゴル・インドネシア・カナダ・スウェーデン・ベトナム・ミャンマー国籍の留学生が得られた。

<参考文献>

- 阿部加奈子・大浜るい子 (2006) 「『謝罪』の日中比較—謝罪の必要が生じた事情の差異に着目して—」『社会言語学会第17回大会発表論文集』 pp.108-111.
- 池田理恵子 (1993) 「謝罪の対照研究 日米対照研究—faceという視点からの一考察—」『日本語学』 第12巻12号 pp.13-21.
- 大浜るい子 (2011) 「誤解に基づく言われのない非難に対する言語行動の分析」『広島大学日本語教育研究』 21号 pp.1-8.
- 熊井浩子 (1992) 「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』 第11巻13号 pp.72-80.
- 熊谷智子 (2013) 「日本語の『謝罪』をめぐるフェイスワーク—言語行動の対照研究から—」『東京女子大学比較文化研究所紀要』 74号 pp.21-96.
- 末田美香子 (2000) 「初対面場面における不同意表明と調整のストラテジー」『日本語教育論集』 16号 pp.23-46. 国立国語研究所日本語教育センター
- 末田美香子 (2014) 「言われのない非難場面における謝罪の意識と言語行動—日本人社会人・日本人学生・留学生の比較から—」『社会言語学会第33回大会発表論文集』 pp.186-189.
- 滝浦真人 (2008) 『ボライトネス入門』 研究社
- 田中典子・ヘレン・スペンサー＝オーティエー・エレン・クレイ (2004) 「『私のせいじゃありません!』: 日本語・英語では、いわれのない非難にどう応答するか」『異文化理解の語用論』 第3章 pp.57-83. 研究社
- 水谷修 (1979) 『話しことばと日本人—日本語の生態—』 創拓社
- 李善姬 (2004) 「韓国人日本語学習者の『不満表明』について」『日本語教育』 123号 pp.27-36.
- Beebe, L.M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In R.C. Scarcella, E. Anderson and S.D. Krashen (Eds.), *On the Development communicative competence in a second language*. Cambridge, MA: Newbury House Publishers. pp.55-73.
- Brown, P. & Levinson, S.C. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ting-Toomey, S. (1994) Face and facework: An introduction. Ting-Toomey, S. (ed.) *The challenge of facework: Cross-cultural and interpersonal issues*. Albany, NY: State University of New York Press. pp.287-305.

【謝辞】

本稿の執筆に当たり、貴重なご意見をいただいた東京女子大学の熊谷智子先生、並びにお忙しい中調査にご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

【付記】

本稿は社会言語学会第33回大会 (2014年3月) において行われた発表に加筆・修正を行ったものである。